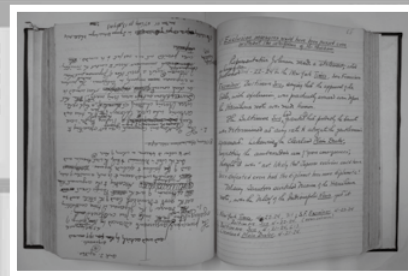


大学文書館へ 行こう

第7回 「展示はちょっと苦手」

北海道大学大学文書館 井上 高聡



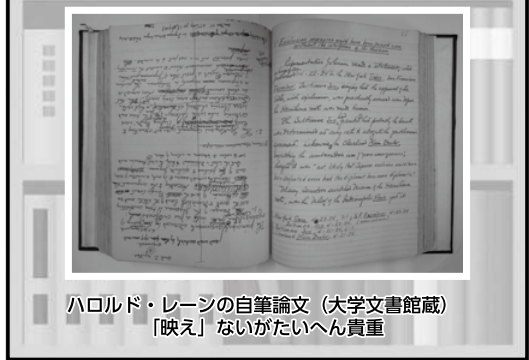
ハロルド・レーンの自筆論文 (大学文書館蔵)
「映え」ないがたいへん貴重

今回は、「大学文書館へ行こう」ではなく、「総合博物館へ行こう」です。

「宮澤・レーン事件」 80周年特別展

一二月四日から来年一月三〇日まで、総合博物館において「宮澤・レーン事件」80周年特別展。事件をめぐる「出会い」と「絆」をたどる「を」、総合博物館と大学文書館の主催、「宮澤・レーン事件を考える会」の協力で開催します。

「宮澤・レーン事件」は、一九四一年二月八日、アジア・太平洋戦争が開戦した日、思想犯などを取り締まる



特高（特別高等警察）が、北大工学部二年生の宮澤弘幸、予科英語教師ハロルド・レーン、ポリン・レーン夫妻を軍機保護法違反の容疑（軍事上の秘密を漏洩した疑い）で検挙した事件です。三名には懲役一五年、一二年の判決が下りました。レーン夫妻は後にアメリカ送還となり、戦後再来日し、ハロルドが北大の英語教師に復帰しました。一方、宮澤は終戦まで獄中生活を送り、戦後釈放されたものの一年余りで病死しました。事件から四五年後、弁護士上田誠吉が『ある北大生の受難』などの著書で、三名が冤罪であったと指摘しました。

「見る」展示を作る

少々重いテーマの展示ですが、ここでは、展示作りを取り上げます。

今回の展示では、宮澤弘幸の在学に関する文書、レーン在籍時の活動を示す資料、宮澤やレーン夫妻と交流のあった外国人教師たちに関する資料、上田誠吉が事件解明のために収集・作成した調査資料、宮澤弘幸の旧蔵資料アルバムなど、大学文書館が所蔵する資料を中心に展示のストーリーを作りしました。これらの資料をストーリーに沿って展示ケースの中に陳列していきます。陳列された実物の資料を見ること、資料そのものの視覚的な訴えや迫力を感じるこ



『満洲グラフ』に掲載された宮澤弘幸の論文 (大学文書館蔵)
文書資料も挿し絵があると見やすい

と、それが展示観覧の第一の楽しみであると思います。

しかし、今回の展示テーマでは、人間関係や事件の性質、法律の解釈など、込み入った内容も重要な要素です。どうしても、ある程度詳細な文字説明が必要になります。そこで、説明パネルを多数設けています。展示ケースの中の資料を補い、ストーリーをより明確にする文字説明です。ただし、長々とした文字説明は観覧者にとってなかなかハードです。展示は本来「見る」ものですから、観覧に無理のない範囲に止める必要があります。展示を成り立たせるための文字説明の必要、展示を見やすくするための文字の削減、そのバランスは展示を作る際には常に課題となります。

展示は文字との戦い

加えて、大学文書館の主要な所蔵資料である文書資料は、視覚的にはたいへん地味です。文書資料は「読む」資料です。多くの場合、「読む」という作業を通じて、その価値や位置付けが分かるものです。「見る」だけではなかなか伝わりません。端的に言えば、「映え」ないので。文字資料は、展



宮澤弘幸とハロルド・レーン (宮澤弘幸旧蔵アルバム)
写真は心強い助っ人

示とはあまり相性が良くない資料と言えると思います。この「映え」ない問題も、大学文書館が展示を作るときに、常に付きまとう難問です。

文字説明をできるだけ少なくすることに注力し、文字資料の地味さを補う工夫をすること。展示は文字との戦いである、と私は思います。

さて、大学文書館がちょっと苦手な展示、今回の「宮澤・レーン事件」80周年特別展では、どんな塩梅でしょうか。実際にご覧いただき、展示の内容にはもちろん、展示作りの苦闘の跡にも、ご注目いただければと思います。